

フロンティアサイエンス機構

Frontier Science Organization

は

先端科学・

イノベーション推進機構

Organization of Frontier Science and Innovation

O-FSI

にかわります。

2012.4.1。

Level up!

★フロンティアサイエンス機構長挨拶
★新機構について

フロンティアサイエンス機構 (FSO) の役割を振り返って

フロンティアサイエンス機構長 長野 勇

当時の学長の林先生から私に研究国際担当理事のお話がありましたのは、平成17年の年の瀬でした。定年までまだ4年ありましたが、JSTの委託研究(がん治療器の開発)は終了し、衛星観測のプロジェクトの研究開発においても優秀な後継者が育っておりました。また、平成12年から務めていた総合メディア基盤センター(平成15年3月までは総合情報処理センター)のセンター長の役職も終わり、研究教育に一つの区切りが出来ましたので、工学部教授を退職して、理事職をお受けしました。1期が終了した後も、引き続き現中村学長から研究国際担当理事を拝命し、今年で通算6年間務めてまいりました。研究国際担当理事の役割は、文字通り、金沢大学の研究推進と国際化の進展で在ります。ここでは、在職中の研究推進(テニュアトラックを中心)に絞って、平成18年から23年度までの6年間の取り組みを振り返るとともに、課題について述べたいと思います。

< FSOの誕生 >

みなさんご存じのように、国は科学技術基本計画に従い、5年ごと科学技術基本計画を策定します。第1期は平成8年-12年、第2期は平成13年-17年、第3期は平成18年-22年で、第4期は平成24年からの5年間についての計画です。この計画では、科学技術の振興に関する施策の総合的な計画が立てられ、それぞれの期間において、およそ17~25兆円の資金が投入されております。私が理事に就任した時期は、まさに第3期科学技術基本計画の始まりでした。

この第3期の基本姿勢は、「社会・国民に支持され、成果を還元する科学技術」「人材育成と競争的環境の重視~モノから人へ、機関における個人の重視」で、科学技術システム改革の一つとして「人材の育成、確保、活躍の促進」が掲げられました。その中身をいくつか取り上げると、公正で透明性の高い人事システムの徹底、若手研究者の自立支援、大学院教育の抜本的強化などです。文部科学省は、この科学技術基本計画に則り施策を立て、各種競争的資金を配分しています。

このような時期に研究担当理事になりました。就任以降、村上学長特別補佐(当時)の協力を得ながら、金沢大学の研究力を強めるための各種戦略の検討を開始しました。先ず、研究戦略室を立ち上げ、学内の限られた資源を効率的に運用し、金沢大学の研究力を強化するための仕掛けを検

討しました。その結果、最初に本学に優位性のある分野への対する重点支援を行う設計の一部としてフロンティアサイエンス機構(FSO)の設立を設立することとなりました。即ち、FSOの中に重点研究プログラムをおき、そこに対して、研究費・人・スペースを集中的に投資するという枠組みができました。

重点研究プログラムには学内の研究レベルの高いプログラムを選考することとしました。平成14年度から始まった21世紀COEプログラムに採択された2つのプログラム(代表者:早川先生、東田先生)と既に拠点化が始まりつつあった原子間力顕微鏡(AFM)(代表者:安藤先生)のプログラムを学長指定とし、それ以外については学内公募を経て選考することとしました。書類審査とヒアリングを行い、学長指定のプログラムと合わせて次の5プログラムを重点研究プログラムに選定しました。

他方、平成18年度から文科省事業でテニュア・トラック(TT)制度導入を推進するための「若手研究者の自立的環境整備促進」事業が開始されました。FSO設立の構想と連動し、この制度を活用して優秀な若手研究者を重点研究プログラムとがん研究所(当時)へ配置する計画を立てました。事業開始年度の18年度に申請しましたが、不採択だったことから、18年度中に学内予算による准教授TTを試行し、平成19年度の申請に向けて体制整備を進めました。この事業の申請では、TT制度の導入と同時に、外部資金獲得や若手研究者の支援をするためのPO、PD構想を提案し、具体的な配置についても検討することになりました。こうした取り組み等を含む提案が評価され、平成19年度に「新領域創成をめざす若手研究者育成特任制度」が採択され、TT制度が本格的に始まりました。

このように、理事就任後1年間は仕掛け作りと準備期間でした。この準備を経て、平成19年4月1日にフロンティアサイエンス機構が設置されました。

< テニュア・トラック(TT)プログラム >

さて、上述の事業の採択を受け、19年度より、JST(FSO所属)型准教授TT、助教TT制度が導入されました。JST型の導入に合わせ、学内への制度の定着を目的とした部局型

の助教 TT 制度が開始されました。

金沢大学が JST の事業に採択された平成 19 年度は、TT 終了後のポストについて、100% 確保することは採択の条件とはなっておらず、提案時は、TT 期間が終了する 5 年後は、原則部局のポストに乗せることを条件としていました。

平成 19 年 5 月に採択され、同年 8 月に関係部局の教授会へ出向き、TT 制度と事業の実施についてのお願いならびに意見交換を行いました。そこでは、TT 終了後のポストについて厳しい意見が示されました。セットアップ時の部局と密接な調整の必要性を感じました。

プログラムの実施状況については、これまでも FSO newsletter 等で報告させていただいておりますので、詳細は割愛しますが、平成 23 年 5 月に最終審査を行い、8 名全員合格しました。その後各部局の人事会議でお諮りいただき、平成 24 年 4 月からは、各部局の教員として本学の教育研究に携わります。ポストは最終的には、部局のポスト利用は 3 名、他は本人限りの学長戦略ポストに移行することになりました。

TT 制度は自立した研究環境で優秀な研究者を育成することを主な目的とした制度ではありますが、学生を育てながら研究をすることが大学教員の姿であり、またある程度ポス社会を体験して新たなポスが生まれるのも事実です。准教授時代から、自立して研究室を運用する形はこれまで日本ではなじみの薄いものでしたが、この制度は昔風の教授育成の制度を変えるものであり、評価は今後に待たれます。教育参加についてはそれなりの仕掛けをしてきたつもりですが、今後の制度運用においては、教育への関与は必須にする必要があると感じています。

これからは、今までのような手厚い支援がない状況で、研究室を運営していかなければなりません。今までとは違う苦勞が絶えないと思いますが、テニユア・トラックの先生方には、これまでと同じように努力、精進して、金沢大学の世界的研究拠点形成に向けて中心的な役割を果たしてほしいと願っています。特に、多くの先生が、特別教育研究経費によるプロジェクトに関与しています。それをうまく活用して、更なる飛躍を期待します。

<フロンティアサイエンス機構の支援体制と本学の研究戦略の課題>

一方 FSO の役割には、金沢大学の研究戦略立案の支援があり、外部資金の獲得や国際的に通用する研究拠点を形成の施策や支援をすることも目的としております。グローバル COE プログラムや博士課程教育リーディングプログラムへの申請において、学長主導の申請が要求されております。

しかし、こうした大型の機関申請型教育研究プログラムの基本は、部局であるということに帰結します。

グローバル COE プログラムの申請の際、最初の構想を学内公募したことは、前述のとおりです。この学内公募は、研究科内での取りまとめ（研究科としての提案）を期待して部局長（研究科長）を通して行いましたが、残念ながら個人の研究が出てきました。こうした背景には、法人主導の影で、部局長裁量の戦略経費が配分されておらず、部局独自の戦略的な研究強化が十分できない状況にあったのではと思います。この点は、中村学長になってから、強いところを強くする方針が出され、各研究域に 2 つのセンターを立ち上げることで、大きな転換になったのではないかと考えています。研究域長のリーダーシップの下、部局主導で研究戦略とそれを踏まえたアクションを取ることで、部局長に戦略が求められるという意識が生まれてきているように思います。大学運営における部局長の役割は、極めて重要です。構成員の教員はこのようなことを考慮して選ばないといけないと思います。法人が大学を作るのではなく、部局からの建設的な提案があって成り立つと思います。やはり教員の能力・研究力を把握できるのは部局長であり、部局長の下で各種申請が出来るシステムを構築しなければ、金沢大学はベスト 10 に近づけないのではと思います。

平成 24 年 4 月には FSO とイノベーション創成センターが統合され、大学の研究能力を向上し、外部資金獲得と産学連携を一気通貫する形で教員支援を行う組織へと変わります。組織は変わりますが、目的は初期の FSO 役割と変わらず研究戦略に基づき金沢大学の教員に対しきめ細かい支援（サービス）を提供する組織であります。24 年度以降のみなさんとともに金沢大学がベスト 10 に発展できるよう支援を充実させて参りますので、引き続きご指導を賜れば幸いです。

FSOの研究支援部門には現在7名が在籍していますが、そのうち、副機構長と在任が1年以上のものから一言述べさせていただきます。

ネクストステージ (O-FSI) へ

FSO 副機構長・有松 正洋

現職について早1年になります。この間個人的には、重点プログラムの研究 チームや TT 教員の皆様方を支援したというよりは、一緒に勉強させて頂き、本学の第一線の研究の状況を色々教えて頂いたという感じです。

新年度から FSO は産学官連携も包含した新しい研究支援組織として生まれ変わりますが、その目的は不変です。一つでも多くの研究分野で国際的な教育研究拠点の形成と優秀な若手研究者の育成が進みますよう、引き続き URA による研究支援活動を活性化させていくつもりです。

今後ともどうぞよろしく♡

これまでとこれから

稲垣 美幸

この立場になって今年の6月で丸5年が経ちます。金沢大学初の研究支援専門職員として採用され、長野先生をはじめとする数多くの先生に幾多のことを教えていただきました。最近、国の方針もあり、研究支援が至るところで言われていますが、結局のところ、支援はあくまで支援にすぎません。そのなかで、自分たちの役割・存在が金沢大学にとって必要なものとして認識されるには、今以上の努力が必要だと感じています。

「金沢大学のために自分たちに何ができるのか？」ということを常に考え、できることは確実に、困難なことにも積極的に、改善すべき点は迅速に対応し、金沢大学のベスト10大学の実現に向けて微力ながら取り組んでいきたいと思えます。

4月から新組織となり、また立場が変わることから、求められる業務も一段と高度になると自覚しています。金沢大学にとって、必要不可欠な存在となれるよう、これまで以上に真摯に取り組んで参りますので、よろしくお願いいたします。

FSO リサーチアドミニストレーターとして今までを振り返って

鳥谷 真佐子

平成20年1月からFSOの研究支援専門職員(リサーチアドミニストレーター)として、FSOの重点研究プログラムを中心に研究支援を行ってきました。当初はわけもわからず必死で、申請書の編集など、先生方のお手伝いをしていました。そうこうしているうちに学内の先生方にも顔を覚えていただき、いろいろ任せていただくようになり、次第にいわば研究チームの一員のような気持ちで打ち合わせなどに参加させていただくようになりました。お蔭様で充実した日々を過ごすことができました。

また、こちらもお役に立てたかどうか分かりませんが、テニュア・トラック教員の先生方とは、より密接に様々なご支援をさせていただきました。季節ごとのFSOの懇親会で、機構長の長野先生を囲み、テニュア・トラックの先生方と一緒に参加させていただいたのはよい思い出です。

テニュア・トラックの先生方はFSOを卒業なさり、それぞれの部局でご活躍なさっていかれますが、FSOが新組織「先端科学・イノベーション推進機構」に変わりましたが、大学全体の研究推進に関わってまいりますので、引き続きご支援させていただきますと存じます。

新組織では、金沢大学の研究の特徴を積極的にアピールするような企画や、大学の研究力の分析などにも力を入れていきたいと思っております。今後も私たちリサーチアドミニストレーターらが研究者の先生方のお役に立てるよう、精進して参りたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

人とのつながり

寺本 時靖

平成21年7月にフロンティアサイエンス機構の研究支援部門に着任して以来、本学のテニュア・トラック事業の運営支援、国際化に関するプロジェクトの支援、産学官が連携した申請の支援、科研費の申請の支援など、多種多様にわたる事業に参与する機会を頂きました。これらの支援活動を通じて、多様な分野にわたる数多くの先生とご一緒に仕事ができたと経験は、かけがえのない大きな財産であります。また先生方からは丁寧かつ親切なご指導やご助言を頂き、約3年間で多くのことを学ぶことができましたことを御礼申し上げます。

約3年間の活動を通して、支援活動は「人とのつながり」が一番重要だと再認識しました。着任するとき、支援活動の基本は事業の主体となる先生方とそれを支える事務の方々から信頼を受けて成り立つ「学内の小さなネットワーク」であると考えておりました。実際に支援業務に携わっていきますと、様々な場面で先生方のネットワークで研究活動や国際的な活動が広がっていくことを体感しました。また研究者のネットワークのみならず、文科省などの国とのネットワーク、産業界とのネットワーク、海外とのネットワークなど多岐にわたる「人とのつながり」が重要であることを再認識させられました。今後とも「人とのつながり」を重視し、私個人のネットワークのみならず、学内から学外までネットワークを広げられるような支援活動になるように努力していきたいと存じます。

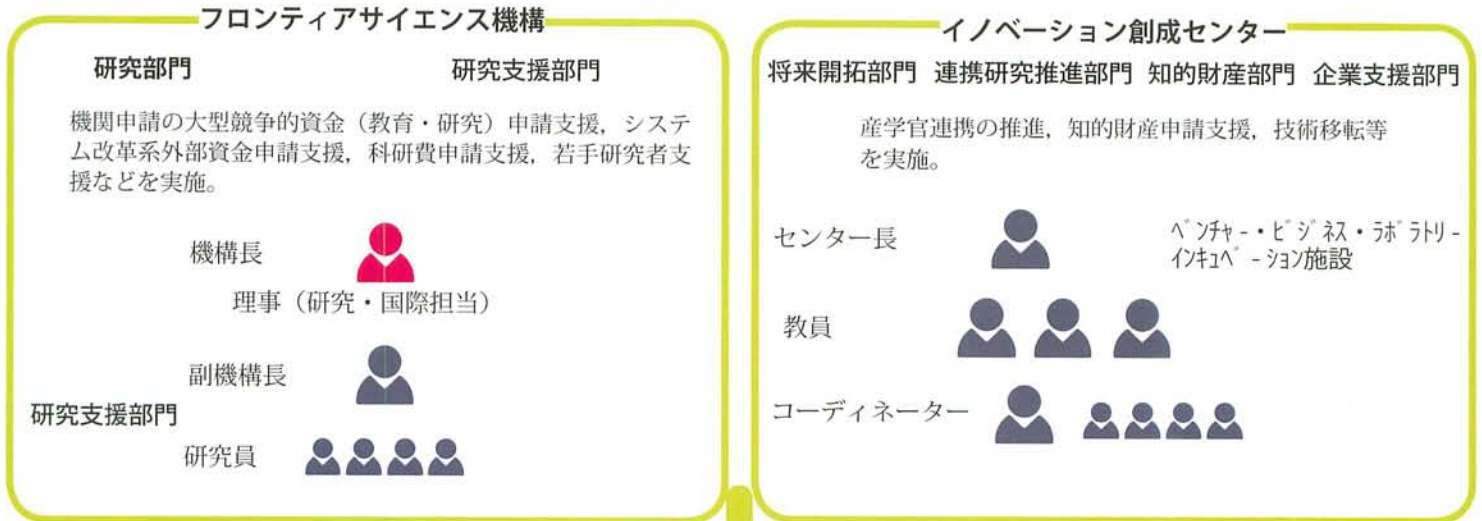
先端科学・イノベーション推進機構

O-FSI

Organization of Frontier Science and Innovation

本機構は、部局等を越えた学際的融合新領域の創出により金沢大学の教育研究の一層の高度化を推進し、かつ基礎研究から応用研究まで一貫した研究支援と産学官連携による研究成果の社会還元を促進し、もって本学の教育研究の活性化と社会貢献に資することを目的としています。

フロンティアサイエンス機構とイノベーション創成センターの役割を補完し合うことで、合理的・効果的研究支援の実現を目指します。
また、同じく4月1日付けで発足する「グローバル人材育成推進機構」の支援も併せて行います。



先端科学・イノベーション推進機構

平成 24 年 3 月 20 日現在
(変更の可能性あります)

★アドミニストレーション部門は、主担当・副担当制をとることにより、グループの垣根を越えた情報共有・業務実施を可能にします。



研究部門

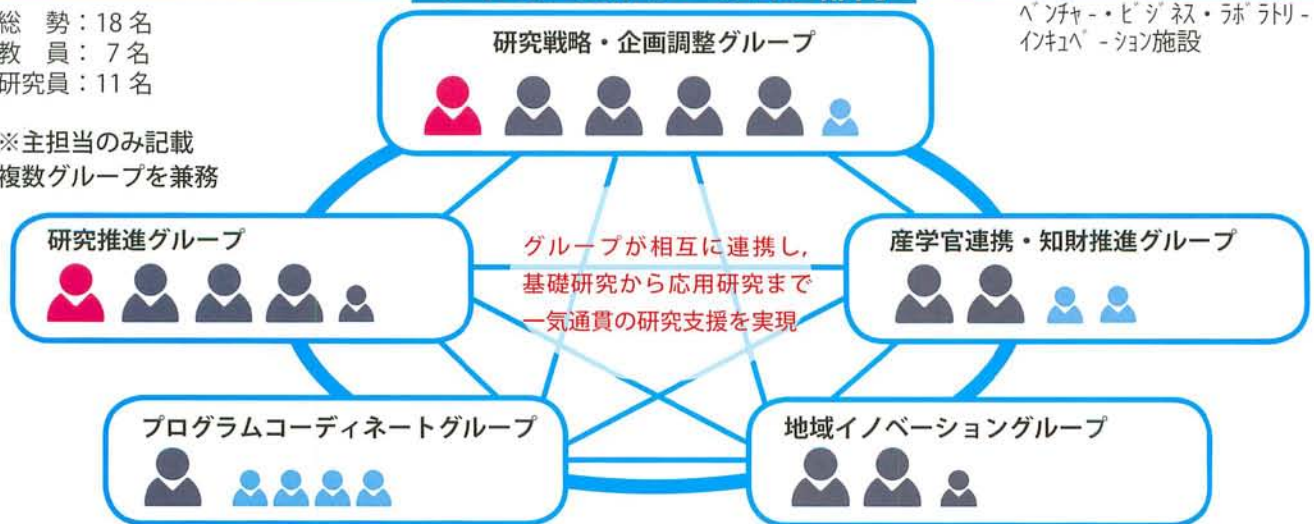
重点研究プログラム（5プログラム）
AFM, 脳科学, 環境, 肝臓, モホール

アドミニストレーション部門

総 勢：18 名
教 員：7 名
研究員：11 名

※主担当のみ記載
複数グループを兼務

ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー
イノベーション施設



各グループの具体的な取り組み

研究戦略・企画調整グループ

- 研究戦略・国際戦略・産学官連携戦略策定のための情報収集・調査・分析・IR ※
- 戦略の企画立案・調整
- 各部署の戦略機能強化支援
- 研究支援人材育成

研究推進グループ

- 外部資金獲得支援
- 重点研究プログラムの推進支援
- 研究グループに対する各種支援
- 若手研究者育成支援

プログラムコーディネートグループ

- 重点研究・教育研究プログラム支援
- 研究成果のPR
- イノベーション教育支援
- 産学育成連携講座支援
- 各部署のプログラム実施支援

産学官連携・知財推進グループ

- 共同研究・受託研究を通じた産学官連携の推進
- 知的財産戦略・管理
- 技術移転
- 起業化支援
- リスクマネジメント

地域イノベーショングループ

- 地方公共団体との連携強化に向けた情報収集や委託業務等の推進活動
- 地域イノベーション創出に係わる基盤(仕組み)づくり
- 地域イノベーション創出に係わる個別事業の提案と実行

※ IR (Institutional Research): 学内の様々な情報を集約・管理・分析し、戦略に活用するための機能

ここが変わる!!

データ分析の充実

専属の IR を配置し、今まで以上に教員の外部資金獲得を含むデータ分析の徹底とそれに基づく研究戦略等策定に寄与します。もちろん、部局長の先生方へもリクエストに応じて、必要なデータを提供します。

部局担当の配置

各研究域担当の人員を配置し、これまでは不十分だった部局密着型支援体制の構築を図ります。また、この部局担当者は、各グループに情報を提供することで、部門として一体的な支援の実現を目指します。こうした体制の充実を図ることにより、基礎研究段階から産業界とのマッチングを進め、共同研究や企業・自治体と共同で申請する外部資金獲得の獲得など、産学連携の推進や、特許取得の支援を加速します。

調整機能の付与による関係部局への積極的アプローチ

本機構のアドミニストレーション部門には、調整機能が規程に明記されました。これは、国の関係事業が一部局だけでは完遂しないものが増えてきていることに起因します。新機構では、この調整機能を最大限活かし、事務部を含む全学的な各種取り組みの支援を積極的に行います。

各種申請支援プログラムの拡充

科研費申請支援を対象としたプログラムだけではなく、他の外部資金獲得や効果的な情報発信に資するプログラムを開催します。具体的なことはこれから検討しますが、部局のニーズを踏まえたプログラムの開催を目指します。

編集後記

FSO Newsletter は、この号をもって終了します。4月から新機構「先端科学・イノベーション推進機構」に改組されますが、引き続き研究活動に有益な情報を発信して参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

文責：稲垣美幸

金沢大学フロンティアサイエンス機構

Newsletter Vol. 10

2012年3月28日発行

発行元

金沢大学フロンティアサイエンス機構

〒920-1192 石川県金沢市角間町

tel: 076-264-5266, 5267, 5268

mail: fsojimu@adm.kanazawa-u.ac.jp

URL: <http://fso.w3.kanazawa-u.ac.jp/>

